



ベクトルの成分

座標平面上（直交座標）に，2点

$$E_1(1,0) \text{ , } E_2(0,1)$$

をとり，2つのベクトル

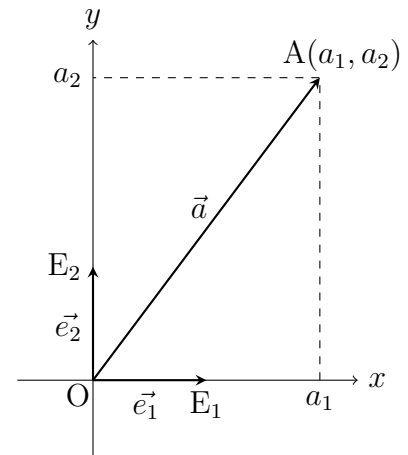
$$\vec{e}_1 = \overrightarrow{OE_1} \text{ , } \vec{e}_2 = \overrightarrow{OE_2} \quad (1)$$

を考える． \vec{e}_1, \vec{e}_2 は，一次独立なので，任意のベクトル \vec{a} に対して，ある実数 a_1, a_2 が存在して，

$$\vec{a} = a_1\vec{e}_1 + a_2\vec{e}_2 \quad (2)$$

と表せる．この表し方は，一意的であったから，単に

$$\vec{a} = (a_1, a_2) \quad (3)$$



と表しても問題はない．

定義． ● (1) の2つのベクトル \vec{e}_1, \vec{e}_2 を基本ベクトルという．

● (2) の表し方を，基本ベクトル表示 という．

● \vec{a} に対して定まる2つの実数 a_1, a_2 を \vec{a} の成分といい， a_1 を x 成分， a_2 を y 成分という．

● (3) の表し方を，成分表示 という．

注意．ベクトル \vec{a} の成分表示 (a_1, a_2) は，上の図からもわかるように， \vec{a} の始点を原点においたときの終点の座標に他ならない．

ベクトルの成分表示と大きさについて次が成り立つ．（三平方の定理から明らか．）

$$\vec{a} = (a_1, a_2) \text{ の大きさは， } |\vec{a}| = \sqrt{a_1^2 + a_2^2} \text{ である．}$$

次の結果から，ベクトルの演算は，成分ごとの演算と考えることができる．

ベクトルの相等・和・差・実数倍

$$\bullet (a_1, a_2) = (b_1, b_2) \iff a_1 = b_1, a_2 = b_2$$

$$\bullet (a_1, a_2) + (b_1, b_2) = (a_1 + b_1, a_2 + b_2) \quad \bullet (a_1, a_2) - (b_1, b_2) = (a_1 - b_1, a_2 - b_2)$$

$$\bullet k(a_1, a_2) = (ka_1, ka_2) \quad (k \in \mathbb{R})$$

証明．ベクトルの相等については，上の注意で言及したように，座標の一致からわかる．

以下では， \vec{e}_1, \vec{e}_2 を基本ベクトルとする．和・差・実数倍については，次のように基本ベクトル表示を用いて証明することができる．

$$\begin{aligned} (a_1, a_2) \pm (b_1, b_2) &= a_1\vec{e}_1 + a_2\vec{e}_2 \pm (b_1\vec{e}_1 + b_2\vec{e}_2) \\ &= (a_1 \pm b_1)\vec{e}_1 + (a_2 \pm b_2)\vec{e}_2 = (a_1 \pm b_1, a_2 \pm b_2) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} k(a_1, a_2) &= k(a_1\vec{e}_1 + a_2\vec{e}_2) \\ &= ka_1\vec{e}_1 + ka_2\vec{e}_2 = (ka_1, ka_2) \end{aligned}$$

□